

## 野生鳥類の化学物質汚染とその影響：特集記事の趣旨説明

石塚真由美<sup>1)</sup>，寺岡宏樹<sup>2)</sup> \*

1) 北海道大学大学院獣医学研究院 〒060-0818 北海道札幌市北区北 18 条西 9 丁目

2) 酪農学園大学獣医学群獣医学類 〒069-8501 北海道江別市文京台緑町 582

[2017 年 3 月 6 日受領，2017 年 8 月 26 日採択]

— 日本野生動物医学会誌 22(4) : 55, 2017

野生鳥類は陸上における最も身近な野生動物でありながら、必ずしも十分な研究が行われているわけではない。しかし、世界的にダイオキシン類、金属類、農薬など、様々な化学物質による野生鳥類の中毒事故が絶えない。通常、生物は環境化学物質に対抗するための生体防御機構を有しているが、鳥類では哺乳類に比較して多くの環境物質に対する感受性が高いことが報告されている。一方、野生鳥類が高度に濃縮する化学物質も知られており、事故による犠牲を含めて、回収された死体は生息域の汚染状況を物語る貴重な試料であるとも言える。

本特集は、2015 年 7 月 30 日 (木) ~ 8 月 2 日 (日)、酪農学園大学で開催された第 21 回日本野生動物医学会大会における学会主催シンポジウム『野生鳥類の化学物質汚染とその影響』(7 月 31 日) を契機として企画されたものである。本シンポジウムでは、実際に頻発している中毒事故や化学物質汚染の実態、さらに野生鳥類の化学物質感受性のメカニズムに関する最新の知見が報告された。

特集記事は以下の 4 編の総説から構成される。

1. ダイオキシン感受性因子としての鳥類 AHR1 遺伝子型と生態要因の関係  
Ji-Hee Hwang<sup>1)</sup>, Hisato Iwata<sup>2)</sup>, Eun-Young Kim<sup>1,2)</sup>  
(<sup>1)</sup> Department of Life and Nanopharmaceutical Science and Department of Biology, Kyung Hee University, (<sup>2)</sup> 愛媛大学沿岸環境科学研究センター)
2. 野生鳥類におけるダイオキシン類のエコトキシコロジー  
久保田 彰 (帯広畜産大学獣医学研究部門基礎獣医学分野、動物・食品検査診断センター)
3. 鳥類で起こっているケミカルハザードとそのメカニズム  
中山翔太, 水川葉月, 池中良徳, 石塚真由美 (北海道大学大学院獣医学研究科)
4. 北海道における野生鳥類の石油汚染・中毒とサハリン開発がもたらす脅威  
齊藤慶輔 (猛禽類医学研究所)

本特集が野生鳥類の化学物質汚染に関する研究の発展に少しでも寄与することを願ってやまない。

\* 責任著者：寺岡宏樹 (E-mail: hteraoka@rakuno.ac.jp)